

# 『雁にあらねど』刊行記念インタビュー

『落ちてぞ滾つ』『いとど遙けし』に続き、三部作がついに完結。  
本作への想い、執筆秘話などを蜂谷涼先生にお聞きしました。



インタビューを受ける蜂谷涼先生

タイトルの古今和歌集の歌の一節から

編集部(以下「編」) 今回で三部完結となる本作『雁にあらねど』のタイトルも古今和歌集からとられています。この清原深養父の歌に決められた理由はありませんか？

蜂谷涼先生(以下「蜂谷」) たまたま見つけたんです。この歌には、源氏物語を書いた紫式部と、枕草子を書いた清少納言のそれぞれの曾祖父のからみがあって、その時代からライバルの血があったのかと以前から面白いと思っていました。

臨場感溢れる場面はどのように生まれたのか

編 三部作を通して、強さ、弱さ、愛情、憎しみなど様々な女性の側面が書かれています。書くのが難しかったシーンや感情というのがありますか？

蜂谷 それはなかつたです。もうほとんど浮かんでくるから、書きづらいうことではないです。

編 第一弾『落ちてぞ滾つ』では、女同士の非常に激しい喧嘩のシーンもありました。ああいったシーンも頭に浮かんだままを書くという感じですか？

蜂谷 浮かんでくるんですけど、動作が不自然じゃない

いかどうかというの、ぬいぐるみを使って実際にやってみることはありますね(笑)。

編 それは意外でした。面白いですね。

蜂谷 手がこつちだったから、足はこつちみたいだね。三部作全体の構想というの、第一弾を書き始めた段階で既に頭の中にあつたのですか？

蜂谷 ありました。話の流れや登場人物の設定なども、最初にだいたい決めていました。

## 登場人物たちの魅力

編 本作ではナギが中心になっていますね。一作目とは違った彼女の新しい魅力を感じました。ナギのキャラクターというの、本作を書く前に決めていたのですか？

蜂谷 実はすべての登場人物の中で一番最初に決まっていたのがナギなんです。こういう人を書きたいというのがあつたので。

編 そうなんです。ナギ、由津、梅乃の三姉妹のよう

## 私の文章作法というのは、計算して文章を捻り出すというのではなく、ふっとわいてくるといふか、降ってくるんです。

しよ。それは絶対に書こうと思つて、一作目から種を蒔いていたんです。

編 この男がどういう形で登場するかも見所の一つですね。

「人は胸に蛟(みずち)を住まわせている」という勘右衛門の台詞や、「蛟」という言葉にまつわるエピソードが印象的でしたが、これは以前から考えられていたことだったのですか？

蜂谷 突然わいてくるんです。計算して捻り出すというのではなくて、ふっとわいてくるというか降ってくるんです。

編 飼いなれない自分というのには誰にでもあるという

な掛け合いも素敵でした。それぞれのキャラクターが本当に魅力的ですよ。

蜂谷 由津と梅乃はわりと共通項があつて、すごく一人の人が好きで、その人に殉ずるみたいなどころがあるんですけど、でも表現はまた別だったりするんですよ。

編 本作では、第一弾『落ちてぞ滾つ』で出てきた坂本龍馬を殺したとほめかす謎の男が、思わぬ形で再登場していますね。

蜂谷 実際にそういう人がいるだろうと思つていたんです。そもそも坂本龍馬を暗殺した人が、今言われている人ではないんじゃないかと、私はずつと思つているので。

そういう人がたとえば西郷隆盛の指示で龍馬を暗殺したならば逃げざるを得ない。逃げるなら西郷の地元のある南ではなく北で

ところから、それを昔の人が子供に語るにはどんな言葉が良いか考え、「蛟」という言葉を使いました。

## 実話から生まれたエピソード

編 勘右衛門とナギの日々の場面は読んでいて心が温まりました。特にナギの描いた絵の件で勘右衛門が寺に怒鳴り込みに行くシーンには感動しました。

蜂谷 実は、ガラス造形作家の浅原千代治先生の娘さんから伺つたお話なんです。彼女が小学生の時に、粘土でお友達顔を造る授業があり、出来上がった、耳の位置が左右で違って、それを先生が「そんな人間はいない」と言つたんです。家に帰つて彼女が泣いていて、浅原先生は「冗談じゃない！人間にそんな完璧な顔形はないんだ」と憤慨し

ていて、それを見た先生が「そんな人間はいない」と言つたんです。家に帰つて彼女が泣いていて、浅原先生は「冗談じゃない！人間にそんな完璧な顔形はないんだ」と憤慨し

蜂谷 あとは、作中のお料理を実際に作つてみたからいすね。

編 『梅の』で出てくるお料理ですか？

蜂谷 そうです。料理が好まうというのもあるけど、料理を書くのって難しいんですよ。当時の素材じゃないとだめだし。なので、出てくるお料理はすべて自分で作っています。

編 作中の卵をぬか漬けにして、上に刻んだ胡瓜の古漬けをかけるという描写がとて美味しそうでした。作品の中のお料理はどれも文章から香つてきそうなんです。

蜂谷 料理は実際に作らないとなかなか書けないんですよ。お料理は以前からお好きだったんですか？

蜂谷 わりと好きですね。お料理とか、模様替えも。お掃除は嫌いです。(笑)。何かをつくるというのがお好きなんです。

蜂谷 インスピレーションや想像力が必要なのが好きなんです。

## 物語の舞台について

編 執筆の期間はどのくらいですか？

蜂谷 だいたい一ヶ月半くらいです。

編 早いんですね。

蜂谷 登場人物が頭の中で動き始めると楽ですね。こちらは整合性がとれているかどうかを見て、あとは勝手に手が動くような感じですね。そうなっちゃうんです。

ただ、台詞は自然になるように心がけているので時間がかかります。

編 今回は北海道弁が多いですね。

蜂谷 あまりネイティブにし過ぎて、道外の人には読みにくくなるので、気を

遣いました。

編 今回の舞台は明治維新の箱館ですが、外国人も登場し、開かれた町の空気が非常に感じられました。

蜂谷 箱館っていうその当時の土地柄もあると思います。他の町と違って早くから開港していたわけだから、外国人に対してあまり差別意識や構えるところがないで、わりとすつと溶け込んでいける感じがありますね。この海は海外と繋がっているんだみたいなことが分かります。

編 本作には箱館の他にも小樽が出てきますが、モデルにした場所などはありますか？

蜂谷 それは特になんですけど、『小樽内騒動』は実際にあつたことなんです。『疵金(きずきん)』という犯人が小樽で捕まり、箱館に移送・処刑され、その首が再び小樽に運ばれて勝内川尻に晒されたのは本当の話です。

幕末の蝦夷地のおいにする事件だと思えます。

## 心に残る登場人物

編 本作で三部作完結となり、いったん登場人物たちとはお別れになります。特に心に残っている、または今後書いてみたい人物はいますか？

蜂谷 うーん、誰だろう。

もう、みんな十分成仏したと思うけど(笑)。やっぱり印象に残っているのは柳川熊吉かな？

編 かつこいいですよ。熊吉さん遺体を埋葬するシーンでは泣きました。

蜂谷 あれは実話なんです。私は物を書くときにほとんど気持ちが悪くならないけど、あのシーンだけは泣きながら書きました。ずつと書きたかつたんです。

編 では、今後、熊吉さんをメインにしたお話を書くことも？

蜂谷 どうでしょうね。これまでの作品で結構かつこいいところを書いてしまつたので、出廻らしになっちゃうかな(笑)。

編 第一弾『落ちてぞ滾つ』発刊時のインタビューで、「トヨはクレソンのような感じ。次はクレソンが主役のクレソン鍋になるかも」とお話されていましたよね。

その後、トヨさんがこのような登場になるとは思わなかつたので、とても面白かつたです。一見、脇役っぽい人が実は……という意外な展開でした。

蜂谷 そうそう。通りすがりの人にスポットライトを当てるといふのがわりと好きなんです。



小樽にあるご自宅のテラスで撮影